

衛生調查書

第二十輯

(實地調查の四)

乳幼児篇

(本島人)

臺灣總督府衛生局課

國立保健医療科学院蔵書



10012082

昭和八年刊行

衛生調查書

第二十輯

(實地調查の四)

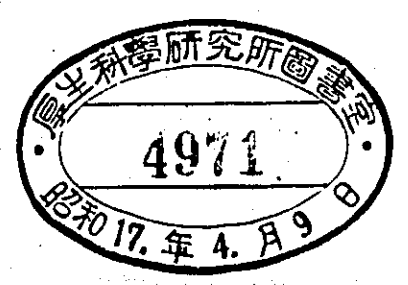
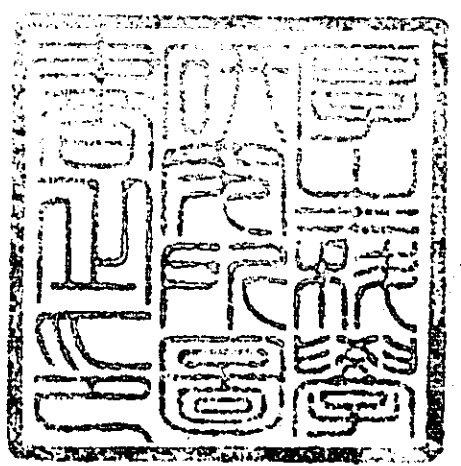
乳幼児篇

(本島人)

臺灣總督府警務衛生課

昭和八年刊行

P
A 12
82



はしがき

本島に於ける人口の推移を観るに、出生率は列國中群を抜いて高く、寔に慶すべきことであるが、一面死亡高率を比照するに至つては餘りに逕庭を極め、治療醫學の進歩した今日に在りては、寧ろ怪訝に堪へない、所謂不經濟な多産多死の現状である。而して死亡高率は全く乳幼児の死亡過多に基因してゐるから、民族衛生、社會衛生上實に由々敷問題である。由來健全なる第二の國民を造るご謂ふ事は、乳幼児を健全に育て上げるにあることは、今更ら贅言するまでもないことである。

晩近、列國は此所に思を致し、是等母性竝に小兒愛護問題に關し、競ふてこれが調査研究に専念し、更に進んでこの改善施設にも善處してゐる状態である。就中乳幼児死亡高率の素因に就ては固より多角的であるが、過去、現在の歸趨を分析して見ると、之が解決の指針を發見し得るものである。本篇も、亦之に鑑み乳幼児一般に關する事象を考察編整して、以て其の資に供せんとしたのである。

昭和八年三月

臺灣總督府警務局衛生課長 森 田 俊 介

乳幼児篇目次

第一 總 說

第二 人口の生成

- 一 生産率
- 二 死亡率
- 三 結婚年齢
- 四 早婚と出産率
- 1 妊孕の有無
- 2 妊孕回数
- 五 乳兒哺育
- 六 離乳期
- 七 妊娠、分娩、育兒に關する風習

第三 乳兒死亡

- 一 總 說
- 二 乳兒死亡率
- 三 保健調査地に於ける乳兒死亡

目次

乳幼児の健康と生活の改善
乳幼児の死亡率の減少
乳幼児の保健調査地における乳幼児死亡
乳幼児の死亡率の減少
乳幼児の保健調査地における乳幼児死亡
乳幼児の死亡率の減少
乳幼児の保健調査地における乳幼児死亡

1	性別	頁
2	地方別	頁
3	死因	頁
4	州廳と乳兒死因	頁
5	生兒の身分と乳兒死亡	頁
6	生存期間と乳兒死亡	頁
7	内地に於ける乳兒死亡との比較	頁
8	列國乳兒死亡の狀勢	頁
第四 幼兒死亡		
一	總說	頁
二	幼兒死亡率	頁
三	死亡原因	頁
第五 乳幼兒死亡		
一	總死亡より觀たる乳幼兒死亡	頁
二	體性と乳幼兒死亡	頁
三	乳幼兒の疾病と死因	頁
四	季節と乳幼兒死亡	頁

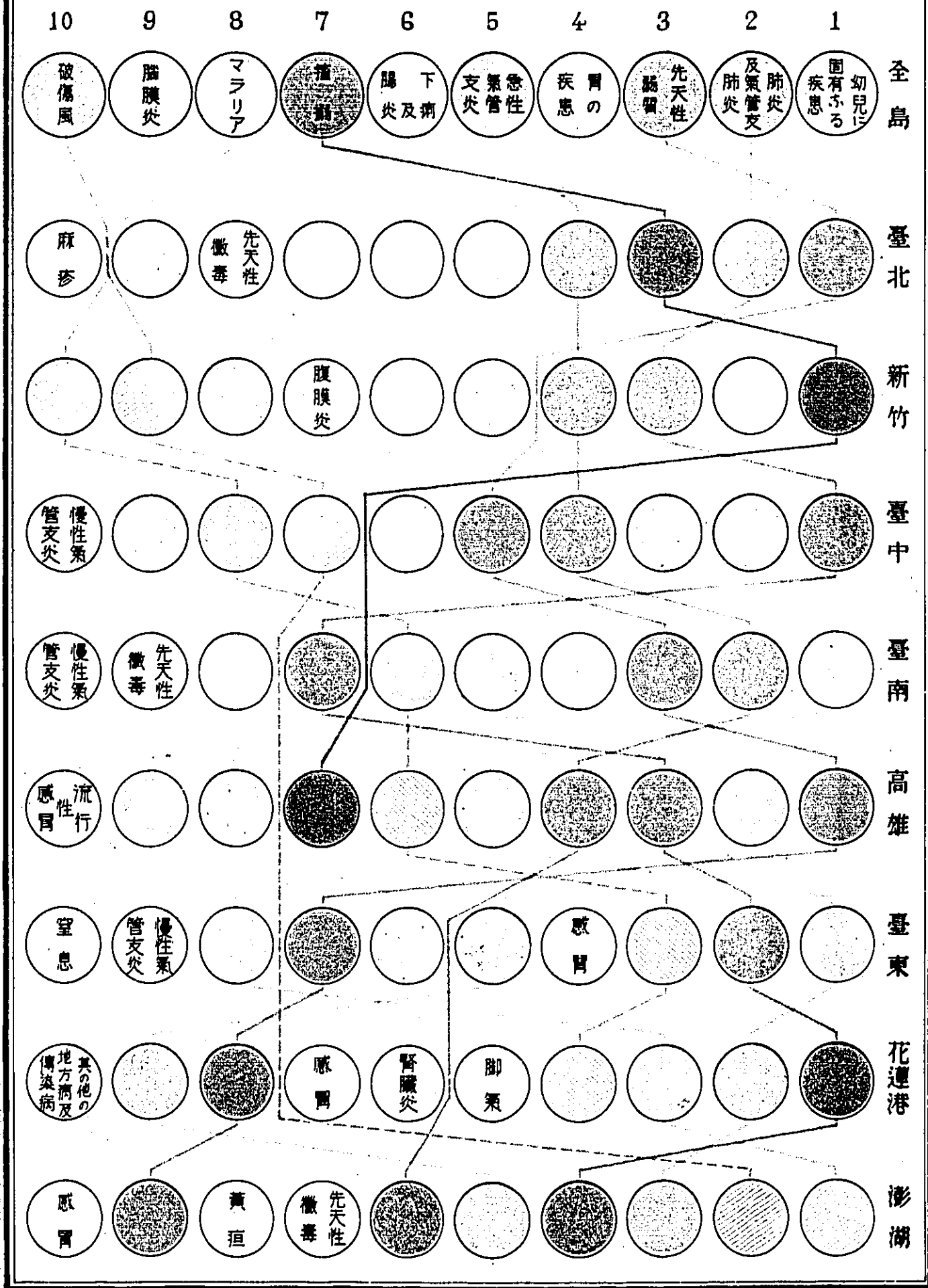
第六 乳幼兒の體格

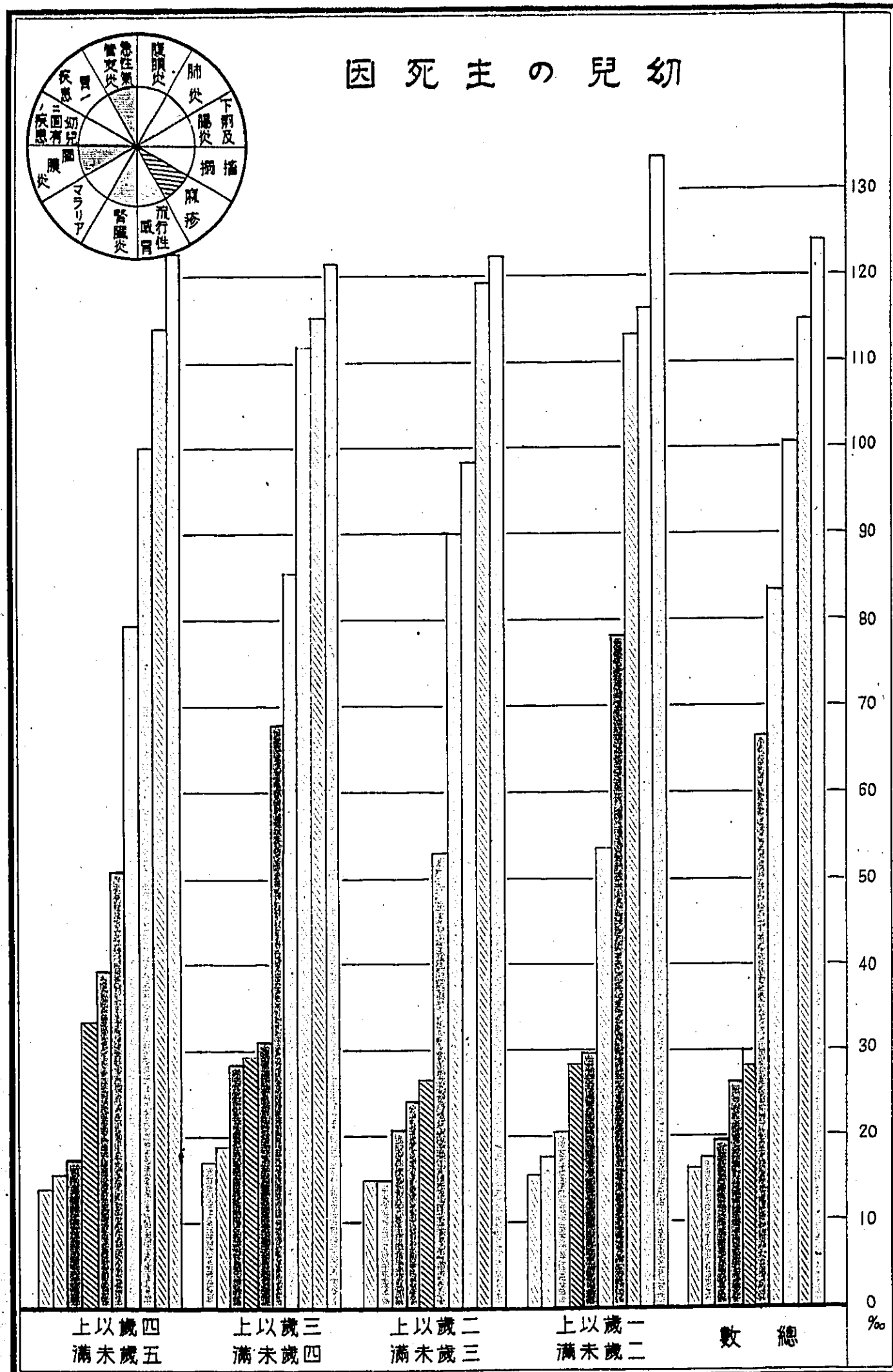
一	體重	頁
二	身長	頁
三	胸圍	頁
四	齒牙の發生	頁

附錄

統計表	頁
-----	---

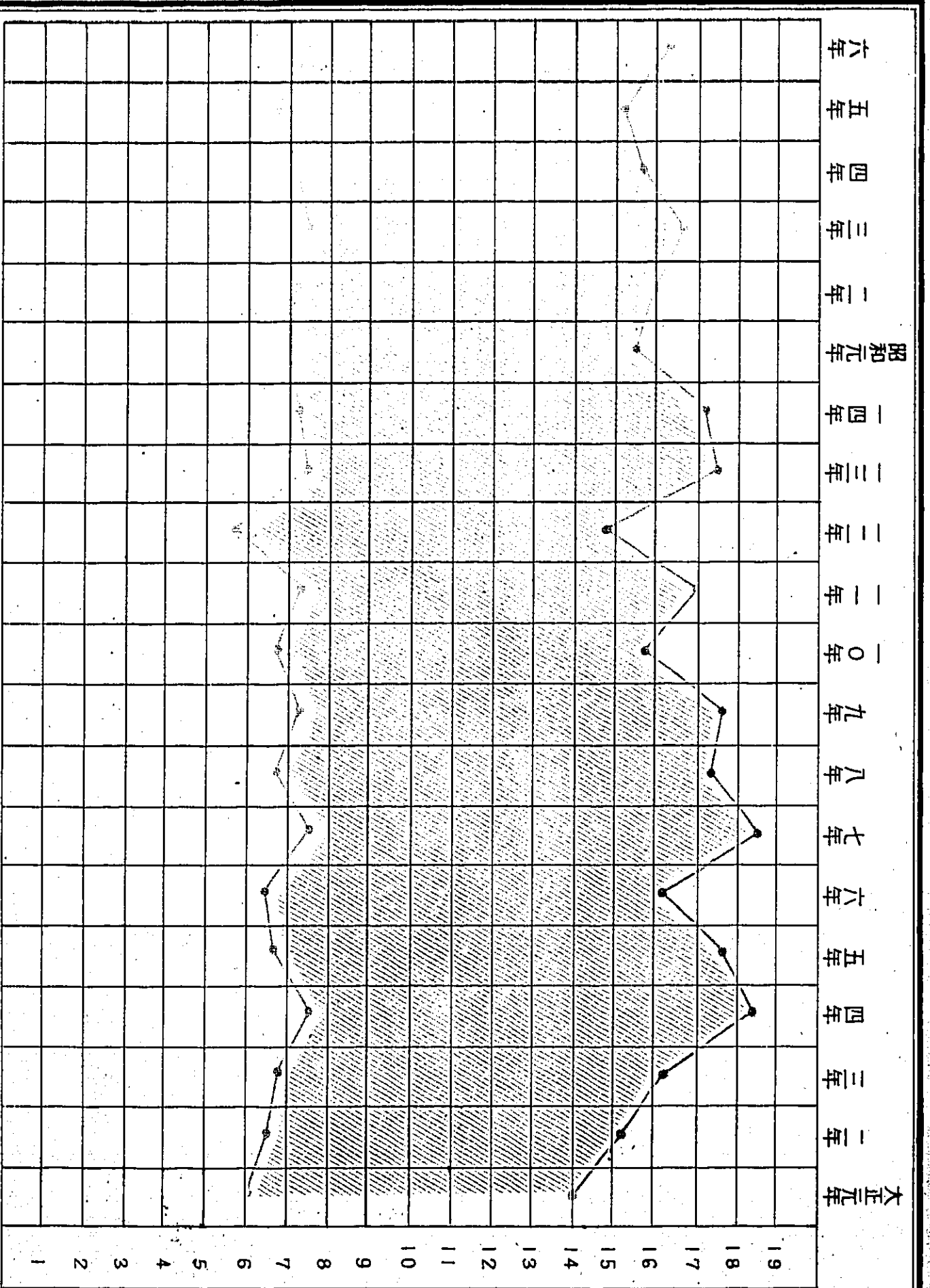
乳兒の主死因



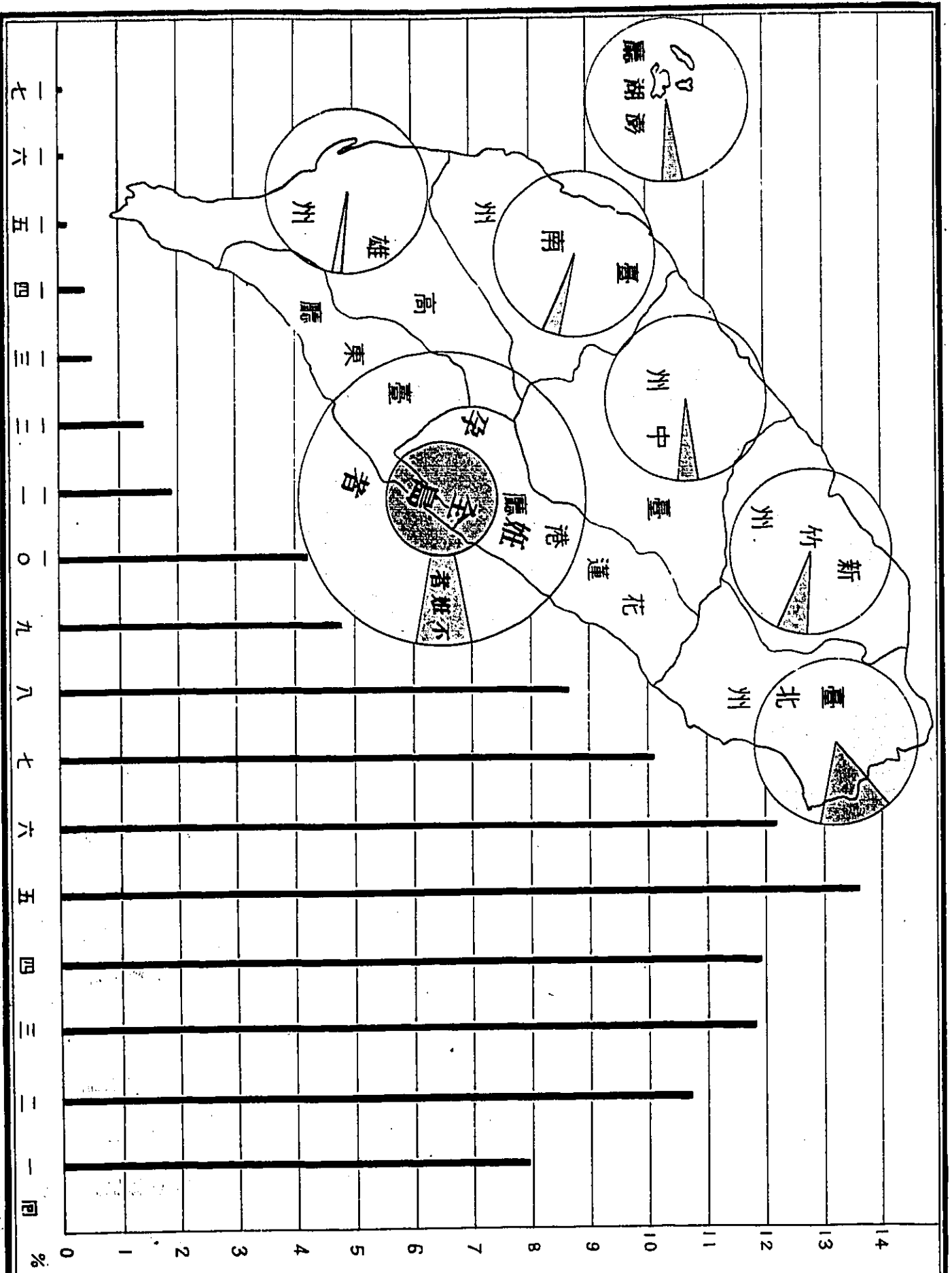


乳兒死亡

● 生產百中死亡
○ 人口千分率死亡



姪孕、有燕及姪孕回數(四十五歲以上)



保健衛生實地調査報告書第四卷乳幼児篇

第一總説

本島に於ける衛生事象は比年改善の域に進みつゝ、あつて、往年流行猖獗を極めた急性傳染病の如きは今や殆んどその跡を絶ち、悽慘そのものであつた風土病の對應策も着々その成果を奏しつゝ、あるの情勢を呈するに至つた。されば出生兒の如きも逐年より高率を見るの好況を示して來たのであるが、一面乳幼児の死亡にありては未だ依然として高率を保ち、減退の歸嚮を示さざるは寔に寒心に堪へない事實である。仍ち本島の生死關係は矢張り多産多死の状態を辿りつゝあるのである。この現象は拓地植民上大影響を及すものであるから、民族衛生上忽諸に付することが出來ない問題である。

蓋し新生兒を克く健康に哺育するには、種々の點に於て深き留意を要するところである。嬰兒特に初生兒にあつては一層保育上の難聲を聽く所である。而かも幼兒の死亡原因たるや、甚だ複雑多岐である。就中氣候、風土等地理的影響を蒙る事の多い事は見逃すことが出來ぬ所である。特に本島のやうな熱帯圏では各種の疾病が分布せられてあることも想像せられる。又民族衛生觀念の低級なると、生活態様の單簡で而かも粗淺淡々たるに左右せらるゝことも否定し得ないのである。茲に難色ありて改善矯正を要する事項の二三を羅列して見るならば、先づ第一に育兒智識の普及と指導とを計り、一面醫療機關としての醫師、産婆の學識、技術の向上と充實とを籌ることが急務である。更

に進んで經濟上不逞で十分に育兒をなし得ざる者に對しては、養育の資を給助すべき施爲も勿論必要である。風俗慣習の上からも力めて悪俗の弊習を打破して、更新の途へ一步を足せしめなければならぬ。

元來本島人は衛生思潮甚しく幼稚であつて、尙かつ疾病育兒に關しては迷信より端を發して不測の轉歸を見ることが、なかく多い事實が看取せられてゐるのである。而して人世の死は素より自然現象のみに支配せられてゐるものでなく、その大半は人意に依つて抑止することが出来る可能範圍がある。即ち食物に注意し、攝生その宜しきを得ば胃腸性の疾患は勿論、消化器傳染病に胃されず済むものである。或は疾病の發生をして豫防醫學上の制約によつて妨止することも敢て難事とせざらぬ。

之を要するに本島に於ける乳幼兒死亡の減少を觀ざるは、固より自然的影響社會的生活狀態及び經濟的事情の總反映であるが、就中母性の生活狀態、住家の非衛生的關係特に狹隘不潔なることが根幹で、之に妊婦の衛生的攝生の缺陷と、出産時に於ける處置の不適なること等に基因する場合が甚大である。

我が保健衛生實地調査は、次代の國民たるべき乳幼兒の發育狀況、竝に健否狀態に關しては特に細心の注意を拂ひ之を精査したものである。而かも本調査は本島に於ける住民健康調査の嚆矢であるのみならず、又唯一無比の國民衛生事情の資料と謂ふべきである。但し本篇は主として各州廳に於ける衛生狀態の不良なる部落に屬する現況であるから、従つて各項孰れも若干低劣なるを免れ得ない。然れども追つて健康地區に於ける本調査の編整に俟つて完璧を期せむとするものである。

本篇に集輯した保健調査施行地を掲ぐると、次の各地である。

□保健調査施行地と其の検査人員

1 臺北州	
回次 施行地	検査人員
一 七星郡士林庄士林	三、三三四
二 基隆郡金山庄の内	二、二二九
三 文山郡深坑庄の内	一、六二二
四 宜蘭郡礁溪庄の内	三、〇九七
五 新莊郡鷺洲庄の内	三、五三四
六 羅東郡三星庄三星	二、七三七
七 新莊郡林口庄の内	三、五〇〇
2 新竹州	
回次 施行地	検査人員
一 新竹市の内	二、〇〇三
二 竹南郡南庄字南庄	一、一九五
三 中壢郡楊梅庄の内	二、四〇四
四 苗栗郡苑裡庄の内	二、七八四
五 竹東郡北埔庄字北埔	二、七四二
六 桃園郡大園庄の内	二、一八八
七 苗栗郡公館庄の内	三、二二八
八 大溪郡大溪街字内稱	三、一一〇

3 臺中州

- 同次 施行地
- 一 大甲郡沙鹿庄の内
 - 二 北斗郡北斗街の内
 - 三 大屯郡霧峰庄柳樹浦
 - 四 彰化郡芬園庄の内
 - 五 大甲郡大安庄の内
 - 六 能高郡埔里街の内
 - 七 員林郡埔鹽庄の内
 - 八 竹山郡鹿谷庄の内
 - 九 南投郡中寮庄の内
- 4 臺南州
- 同次 施行地
- 一 新化郡新市庄の内
 - 二 新營郡後壁庄の内
 - 三 北門郡佳里庄佳里
 - 四 嘉義郡中埔庄の内
 - 五 嘉義郡水上庄の内
 - 六 曾文郡官田庄の内
 - 七 虎尾郡二崙庄の内
 - 八 新營郡白河庄の内
 - 九 東石郡鹿草庄の内
 - 十 斗六郡大埤庄の内
 - 十一 新營郡歸仁庄の内

- 検査人員
- 二、〇一五
 - 一、三九一
 - 一、四一七
 - 三、八九五
 - 二、六八一
 - 三、八一九
 - 二、八四九
 - 二、七六二
 - 二、八〇〇
- 検査人員
- 五、七六四
 - 五、三一一
 - 四、〇八五
 - 二、一〇一
 - 二、九六九
 - 二、五〇四
 - 二、七九五
 - 二、三四九
 - 二、七三九
 - 二、六三四
 - 二、五四〇



- 七 北港郡元長庄元長、合和
 - 八 新化郡玉井庄の内
- 5 高雄州
- 同次 施行地
- 一 高雄市三塊厝
 - 二 鳳山郡小港庄荊藿脚
 - 三 岡山郡彌陀庄赤崁
 - 四 屏東郡長興庄麟洛
 - 五 旗山郡旗山街圓潭子
 - 六 潮州郡萬福庄の内
 - 七 東港郡新興庄炭頂、洲子

- 6 臺東廳
- 同次 施行地
- 一 臺東支廳東東街の内
 - 二 卑南賦の内
 - 三 卑南支廳卑南區の内
 - 四 卑南支廳卑南區の内
 - 五 卑南支廳卑南區の内
 - 六 卑南支廳卑南區の内
 - 七 卑南支廳卑南區の内
- 検査人員
- 二、〇七五
 - 八八五
 - 二、四六七
 - 二、二九二
 - 一、四九九
 - 二、四四二
 - 二、七四五

- 7 花蓮港廳
- 同次 施行地
- 一 花蓮支廳吉野區吉野村
 - 二 花蓮支廳吉野區の内
 - 三 鳳林支廳瑞穗區
- 検査人員
- 二、二六二
 - 三、二二八
 - 七、五七二

8 澎湖廳

同次 施行地

検査人員

一 馬公支廳湖西庄の内

三、五二四

二 同 白沙庄の内

四、二〇一

三 同 西嶼庄の内

四、六三六

本篇には以上調査施行地に於ける身體検査成績の外、別に調査地域内既往十箇年間に互る乳幼児死亡の状態に就いて敘述したものである。

第二 人口の生成

乳幼児に關する一般事象を考察するに先ち、順序として本島に於ける人口生成の推移を叙述して見やう。

本島へは移民が少い關係から、人口の増加は一に自然的内部の原因であらねばならぬ、即ち出生超過(死亡に對比して)に俟つ外はないのである。而して人口の觀念には數の増減、即ち量的變移と、男女の權衡、年齢構成等の出産に關する要約、即ち質的變異の二つの意義が含まれてゐるのである。本島に於ける人口は明治三十八年十月一日施行の第一回戸口調査の結果に依れば三百萬であつたが、夫から八箇年を経過した大正元年末には三百三十五萬に上り、更に十五箇年を経過した昭和元年末には八十萬の激増を示し四百十五萬となつた。最近昭和六年末には四百六十二萬人に遞増し、過去二十年間に四割一分の増加率を呈してゐる。而かも第一回の戸口調査を施行した明治三十八年末現在人口に比較するときは、實に五割五分(〇・五四七)の激増である、即ち過去二十六箇年間に約六割の人口が増加した勘定である。

次に男女の權衡を観察すると、明治三十八年第一次戸口調査の成績に依ると、男は女百につき一二・七人の多數を示してゐたが、大正元年には一一・〇九人に減し、爾來逐年男の比率低減して最近昭和六年には同上比率一〇・四九人となり、男女殆んど均衡を保つに至つた。新生兒は常に男多數なるを列國共通の事實としてゐる。本島に在りても嬰兒期には男多を常型としてゐる。然れども男の死亡は又高率であるから、漸次年の経過に伴つて男女同數より、女が多數となり、老年に至りては全く女多を示すものである。本島も文化の向上に連れて男の低減となり、聽て男女數の接近を見ることは想像に難くない。大正元年以來の過去二十箇年間に於ける、人口總數と男女の權衡とを表章するときは、次表の如くである。

□最近二十箇年間の體性別人口 (各年末調査)

年	人口總數	指數	男	女	女百につき男
一	3,350,000	100	1,732,484	1,617,516	110.9
二	3,380,000	101	1,748,000	1,632,000	110.8
三	3,410,000	102	1,763,516	1,646,484	110.7
四	3,440,000	103	1,779,032	1,660,968	110.6
五	3,470,000	104	1,794,548	1,675,452	110.5
六	3,500,000	105	1,810,064	1,689,936	110.4
七	3,530,000	106	1,825,580	1,704,420	110.3
八	3,560,000	107	1,841,096	1,718,904	110.2

年	人口總數		指 數	男		女		女百につき男
	總數	指數		男	女	男	女	
昭和六年	35,330	110	17,013	18,317	1,304	105.9		
昭和七年	35,137	110	16,960	18,177	1,217	105.7		
昭和八年	35,256	111	17,020	18,236	1,216	105.7		
昭和九年	35,193	111	16,960	18,233	1,273	105.8		
昭和十年	35,292	112	17,060	18,232	1,172	105.6		
昭和十一年	35,376	113	17,136	18,240	1,104	105.5		
昭和十二年	35,308	113	17,060	18,248	1,188	105.6		
昭和十三年	35,100	112	16,920	18,180	1,260	105.8		
昭和十四年	35,166	112	16,980	18,186	1,206	105.8		
昭和十五年	35,232	113	17,060	18,240	1,180	105.7		
昭和十六年	35,293	113	17,130	18,163	1,067	105.1		
昭和十七年	35,176	112	17,010	18,166	1,156	105.9		

年齢構成の状態を最近施行の國勢調査(大正十四年十月一日現在)の結果に徴すると、乳幼児級に於て最多を示し、遞次年齢の長するに従つて減少してゐる。故に乳兒級を底部とし、順次に各歳を累積するときは、年齢の上るに従ひ一歳毎に幅員を減して最高老級を頂尖端とした金字塔型を形成してゐる。特に生産年齢者一五歳乃至六〇歳に於て五六四〇を示して、遙に不生産年齢者を凌駕してゐることは意を強ふするに足ると謂ひやう。

其の詳細を表示するときは、次表の通りである。

□年 齡 別 人 口 (大正十四年十月一日調査)

年	實 數	百 分 比	年 齡	實 數	百 分 比
〇	30,751	50.9	四〇	3,711	5.6
一	27,501	45.0	四五	1,813	2.6
二	23,250	38.5	五〇	1,577	2.3
三	21,250	35.0	五五	1,000	1.5
四	19,000	31.6	六〇	565	0.8
五	17,000	28.5	六五	335	0.5
六	15,000	25.0	七〇	215	0.3
七	13,000	21.6	七五	115	0.2
八	11,000	18.5	八〇	65	0.1
九	9,000	15.0	八五	35	0.05
計	35,176	100.0	以上	35,176	100.0

本表には蕃地に居住する蕃人を算入せず。

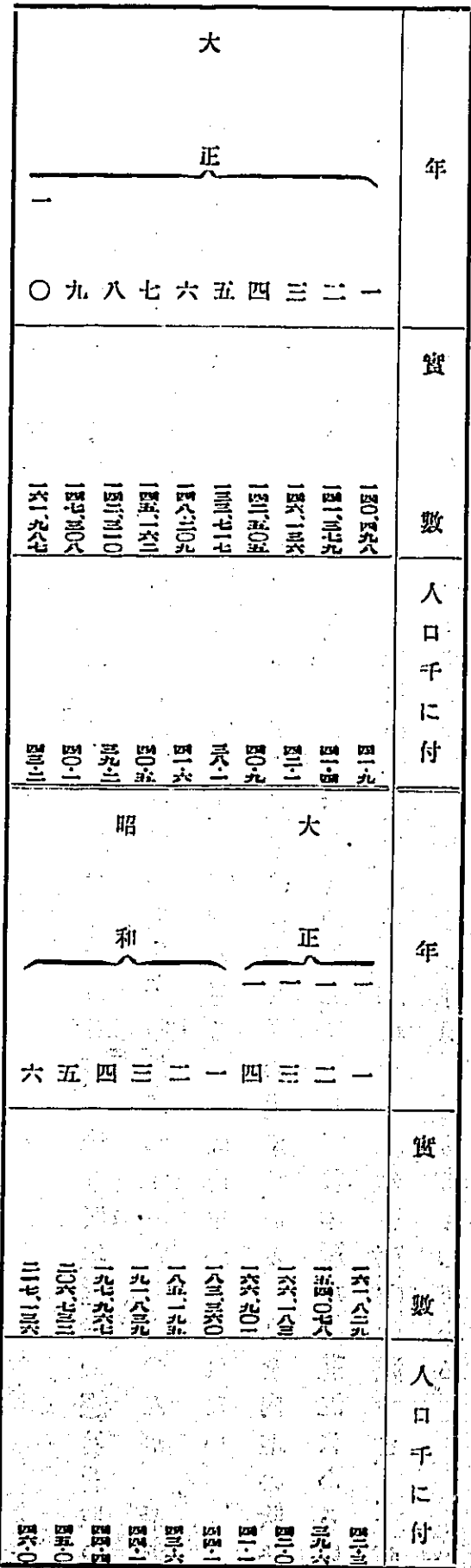
一 生 産 率

本島に於ける出生は従來起伏常なきの觀を呈してゐたのであるが、晩近累年遞増の趨勢を取つて來た。領臺以來大正初年頃の出生率(人口一千人に付ての出生子の數)は四十一人であつたが、最近昭和六年には四十六人に上つた。而し之を本島の出生率常型と見ることは尙早かも知れない。

翻て、列國に於ける生産率の狀況を見るに出生減退は各國共通の現象である、之を内地の狀勢に見ても近年稍々低下の傾向が認められる。獨り我が臺灣のみ之に反して各年遞加の狀況にあるは體に衛生思潮の向上にあるは否むことの出来ない事實である。然れども乳幼兒死亡の減少と、一面社會的、心理的影響とに因り出生減退の時期に到達することも豫想し得らるゝのである。

大正元年以降二十箇年間に於ける、本島の出生率を表示すると、次の如くである。

出生率



出生の地理的影響を昭和元年乃至同六年の事實に就て之を考察すると、臺中州は最高率を示しその比率四七二人である。臺南州は臺中州より幾に低く四六八人を示して第二位を占めてゐる。之を要するに北回歸線を畫しその内外の中部地方が多産地區と謂へる。次に島都を包含してゐる臺北州は島内中最低率にして、對人口の比率は三九四人で最高臺中州に比照するときは實に八人の寡少である。蓋し同州人口九十五萬(昭和六年末)中臺北、基隆兩市の人口は三分の一強の三十三萬を擁し、地理的影響の外に社會的に又經濟的原因から出産に少數を來したことも亦一因である。

澎湖廳は臺北州に亞て低率に屬し四〇六人を示してゐる。本廳は人口の稠密なるに反して天惠薄く、農産物の如きは豊稔の年にあつても半歳を支ふる程度であるから、従つて居住民の多數は對岸本島に出動する者多く所謂夫婦別居の状態にあるは蓋し歎し難き影響ならむ乎。臺東、花蓮港の兩廳

も澎湖廳に亞く低位を示し、前者は四二六人、後者は四一〇人である。臺東廳は緯度から見ても餘りに出産率としては低位に過ることが氣付かる、然れども前兩廳に於ける住民は「アミ族」及び「パイワン族」に屬する蕃人大部分を占め、これ等の蕃族は濫婚の習俗に染み、贅婿法なる家族制を墨守するが爲め、相續の嗣女は轉々夫を易ふることを意とせず、又夫は妻家に入籍するも忽ち去つて他に配を求むるが如き状態であるから、離合常なき配偶關係上生産率に影響を及ぼすものならむ乎。

新竹州は北南部の中位にあり、高雄州は臺南州と伯仲の間にある状態である。而して全島生産率平均位(四四六人)より高きは臺中、臺南、高雄の三州である。

今、昭和元年乃至同六年の出生率を地方別に表示するときは、次表の通りである。

出生率

地方	最近六箇年平均					
	昭和六年同	五年同	四年同	三年同	二年同	元年
全島	146.0	140.0	135.0	130.0	125.0	120.0
臺北州	146.0	140.0	135.0	130.0	125.0	120.0
臺中州	146.0	140.0	135.0	130.0	125.0	120.0
臺南州	146.0	140.0	135.0	130.0	125.0	120.0
高雄州	146.0	140.0	135.0	130.0	125.0	120.0
花蓮廳	146.0	140.0	135.0	130.0	125.0	120.0
臺東廳	146.0	140.0	135.0	130.0	125.0	120.0
澎湖廳	146.0	140.0	135.0	130.0	125.0	120.0

二 死亡率

本島の死亡率を瞥見するに、一高一低全く不定型であつた。之を人口千に對する累年死亡率の最高、最低の兩極線を對比すると、其の差實に十三人に達してゐる。之は本島に流行性疾患の散發的に猖獗を極めたる片鱗を物語るものである。かく本島の死亡率は犬牙錯綜の状態を續け、歸一するところ無き觀を呈露したものであるが、大正十年頃より比較的平衡なる比率維持に加へ、且つ逐年減少の傾向を辿りつゝあるは、衛生界一切の清算と目すべき保健衛生の向上刷新の成果に外ならないのである。

今、本島人口に正確を畫した、第一次戸口調査施行の明治三十九年に於ける死亡率を見るに三十四人(人口千につき)、以下之に同じてふ愕くべき高率で、爾來同四十二年まで連歳三十人臺を占めてゐたが、同四十三年に至り三十人臺を割り二十八人に遞減した。次で大正四年及び同七年には世界を席卷した流行性感胃の猖獗のため前者は三十二人、後者は三十五人の死亡高率を見たる外は逐年減少を續けた、就中大正十二年は二十二人の低率である。然るに昭和五年には大減少を告げ、二十人臺を割つて内地に匹敵すべき十九人五分の記録を作つた。然るに同六年には逆轉して二十一・四分に上つたが、同五年の好率を除くときは最低率である。

次に出生率と同じく大正元年以後の死亡率を表示すると、次表の通りである。

□ 死亡率

年	實數	人口千につき	年	實數	人口千につき
大正	一	八四・六五	昭和	一	二五・〇
二	八六・〇六	二五・五	二	八四・〇六	二六・
三	九七・五二	二六・二	三	九六・四九	二四・九
四	一三三・三三	三三・三	四	九八・〇〇	二四・一
五	一〇七・四五	二九・五	五	九七・〇〇	二三・六
六	九七・九六	二八・五	六	九八・〇〇	二三・
七	一三三・三七	三三・八	七	九八・〇〇	二三・
八	九七・九六	二八・五	八	九八・〇〇	二三・
九	一〇七・四五	二九・五	九	九八・〇〇	二三・
一〇	九七・九六	二八・五	一〇	九八・〇〇	二三・
一一	一三三・三七	三三・八	一一	九八・〇〇	二三・
一二	九七・九六	二八・五	一二	九八・〇〇	二三・
一三	一〇七・四五	二九・五	一三	九八・〇〇	二三・
一四	九七・九六	二八・五	一四	九八・〇〇	二三・
一五	一三三・三七	三三・八	一五	九八・〇〇	二三・
一六	九七・九六	二八・五	一六	九八・〇〇	二三・
一七	一〇七・四五	二九・五	一七	九八・〇〇	二三・
一八	九七・九六	二八・五	一八	九八・〇〇	二三・
一九	一三三・三七	三三・八	一九	九八・〇〇	二三・
二〇	九七・九六	二八・五	二〇	九八・〇〇	二三・

三 結婚年齢

結婚は家族制度の基礎となり、社會生活現象に反映する、即ち結婚の増加は經濟界の繁榮を裏書するものと謂ひ得る。又反面より之を見れば結婚は國家隆昌の吉兆である、即ち出生増加の胚子となるからである。然れども社會の進歩と文化の向上に隨伴して經濟事情いよゝゝ複雑化し、従つて結婚難に陥り、次で出生も亦減少するは自然的趨向である。

今、人口動態統計を觀るに人口千につき結婚は、大正元年には十一組三分を示してゐる、而して昭和五年には十組一分に減少してゐるが、列國に比照すると本島は未だ高率なのである。

かくの如く結婚率の高きは慶すべき現象であるが、結婚當事者の初婚年齢が餘りに早婚である。元來暖國は早婚の風あるの外、本島民の如く賣買婚に厄せらるゝことも一因であると謂ひやう。

結婚年齢は我が民法上の規定では男は十七歳、女は十五歳となつてゐるが、これは最低年齢を示したものである。然るに本島人女子にありては十一、二歳の初婚者が稀とせない。是等は後に敘述する乳幼児死亡の高率に影響することが甚大である。即ち成熟の完全せざる中に結婚生活に入るは、其の生児に弱素質を與ふる計りでなく、嬰兒の哺育上に對しても周到ならざる缺點あることは否むことが出来ぬ。

次に最近昭和三年乃至同五年に於ける妻の結婚年齢を観るに、一五—一九歳に於て全結婚の六割二分を占めてゐる、之を内地に於ける最多結婚年齢は二〇—二四歳であるから、本島は約五歳の早婚である。而かも十五歳未満にして結婚せし者二四%を認むるは顯著なる特種事象と謂はなければならぬ。

地方別に結婚年齢を観察するに、各州縣とも一五—一九歳を最多とするは同軌にして、就中臺南州の六割六分を首位とし、新竹六割四分、臺北六割一分の兩州之に屬する、又低位にあるは臺東廳の四割八分にして、花蓮港(五割一分)、澎湖(五割四分)の兩廳之に屬してゐる。茲に奇異の概あるは本年齡間にあつては最低位にある臺東廳が一五歳未満者の多數(一五歳未満者の最多は臺北州の四六%、第二位は臺東廳の四四%)なることである。これ或は臺東廳(花蓮港廳も同じ)に於ける「アミ族及び「ブエ」族蕃人の婚姻は贅婿法即ち婿養子縁組であるから、家政經營上よりと容易に養子を物色し得るに職由するものならむ乎。

最近三箇年(昭和三年乃至同五年間)に於ける詳細なる妻の結婚年齢を表示して本項を結ばんとす。
妻の結婚年齢 (實數)

年 齡	最近三箇年の實數									
	總數	一五	一六	一七	一八	一九	二〇	二一	二二	二三
全島	1,000,000	150,000	180,000	200,000	220,000	240,000	260,000	280,000	300,000	320,000
臺北州	3,000,000	450,000	550,000	600,000	650,000	700,000	750,000	800,000	850,000	900,000
新竹州	1,500,000	220,000	280,000	320,000	350,000	380,000	400,000	420,000	440,000	460,000
臺中州	2,000,000	300,000	350,000	400,000	450,000	500,000	550,000	600,000	650,000	700,000
臺南州	2,500,000	380,000	450,000	520,000	600,000	680,000	750,000	820,000	900,000	980,000
高雄州	1,800,000	270,000	320,000	370,000	420,000	470,000	520,000	570,000	620,000	670,000
臺東廳	1,200,000	180,000	220,000	260,000	300,000	340,000	380,000	420,000	460,000	500,000
花蓮港廳	1,000,000	150,000	180,000	210,000	240,000	270,000	300,000	330,000	360,000	390,000
澎湖廳	800,000	120,000	140,000	160,000	180,000	200,000	220,000	240,000	260,000	280,000



年 齡	最近三年の平均									
	五	六	七	八	九	十	十一	十二	十三	十四
全 島	117	110	105	100	95	90	85	80	75	70
臺北州	110	105	100	95	90	85	80	75	70	65
新竹州	110	105	100	95	90	85	80	75	70	65
臺中州	110	105	100	95	90	85	80	75	70	65
臺南州	110	105	100	95	90	85	80	75	70	65
高雄州	110	105	100	95	90	85	80	75	70	65
臺東廳	110	105	100	95	90	85	80	75	70	65
花蓮港廳	110	105	100	95	90	85	80	75	70	65
澎湖廳	110	105	100	95	90	85	80	75	70	65

年 齡	最近三年の平均									
	五	六	七	八	九	十	十一	十二	十三	十四
全 島	101	96	91	86	81	76	71	66	61	56
臺北州	101	96	91	86	81	76	71	66	61	56
新竹州	101	96	91	86	81	76	71	66	61	56
臺中州	101	96	91	86	81	76	71	66	61	56
臺南州	101	96	91	86	81	76	71	66	61	56
高雄州	101	96	91	86	81	76	71	66	61	56
臺東廳	101	96	91	86	81	76	71	66	61	56
花蓮港廳	101	96	91	86	81	76	71	66	61	56
澎湖廳	101	96	91	86	81	76	71	66	61	56

□妻の結婚年齢 (千分比)

年 齡	最近三年の平均									
	五	六	七	八	九	十	十一	十二	十三	十四
全 島	100	95	90	85	80	75	70	65	60	55
臺北州	100	95	90	85	80	75	70	65	60	55
新竹州	100	95	90	85	80	75	70	65	60	55
臺中州	100	95	90	85	80	75	70	65	60	55
臺南州	100	95	90	85	80	75	70	65	60	55
高雄州	100	95	90	85	80	75	70	65	60	55
臺東廳	100	95	90	85	80	75	70	65	60	55
花蓮港廳	100	95	90	85	80	75	70	65	60	55
澎湖廳	100	95	90	85	80	75	70	65	60	55

年	齡	全	島	臺北州	新竹州	臺中州	臺南州	高雄州	臺東廳	花蓮港廳	澎湖廳
最近三年平均	均	四〇一四四	三三三三三	三〇一三四	二五二二九						
	總	四三二一〇	三三三三三	三三三三三	二二二二二						
	數	四三二一〇	九八七六五	四三二一〇	九八七六五						
	數	四三二一〇	九八七六五	四三二一〇	九八七六五						
	六〇歲以上	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
	五五-五九	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
	五〇-五四	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
	四五-四九	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇

年	齡	全	島	臺北州	新竹州	臺中州	臺南州	高雄州	臺東廳	花蓮港廳	澎湖廳
最近三年平均	均	四〇一四四	三三三三三	三〇一三四	二五二二九						
	總	四三二一〇	三三三三三	三三三三三	二二二二二						
	數	四三二一〇	九八七六五	四三二一〇	九八七六五						
	數	四三二一〇	九八七六五	四三二一〇	九八七六五						
	六〇歲以上	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
	五五-五九	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
	五〇-五四	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
	四五-四九	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇

四 早婚と出生率

出生率の検討は民族生物学的見地より極めて重要な問題である、而して出生率を左右する原因としては(1)民族の年齢構成、特に妊娠可能年齢に在る女子の員数(2)風土の影響(3)経済的事情(4)文化的発展に依る影響等を数へらるる所であるが、又早婚の出生率を高からしむる影響も見逃すことが